

栗ヶ沢バプテスト教会 26-02-08 主日礼拝説教  
「神と格闘する」創世記 32：23-31 木村一充牧師

本日は旧約聖書の創世記 32 章から、ヤコブの物語を共に読みたいと思います。今日の箇所は、ヤコブがヤボクという川の岸辺で神様と格闘するという、とても印象的な出来事が書き記されている所です。ヤコブは今、20 年ぶりに故郷カナンに帰ろうとしています。しかし、ヤコブの心の中には大きな重荷、兄に対する負い目がありました。それは、かつて母リベカと共に謀して兄エサウに変装し、本来は長男の兄エサウが受けるはずであった父イサクからの祝福を、不正に奪い取ってしまったことに対する良心の痛みです。このことを知った兄は激しく怒り、父親が亡くなったら弟を殺そうと決意するのであります。それを避けるため、ヤコブは母の実家があるハランの地に逃れ、そこで叔父ラバインのもとで働き、二人の妻と子どもたちを与えられるという出来事を経て、故郷のカナンの地に帰って来たのです。

20 年という時の流れの後、兄エサウとの再会を目前にして、ヤコブは「わたしは兄が恐ろしいのです」（32：12）と言います。それは、兄が 400 人の従者を連れてこちらに向かっているとの知らせを使いの者から聞いたからです。そこで、ヤコブは兄の怒りを宥めるために羊や牛、ラクダやロバなど、合わせて 500 頭を超える財産を兄への贈り物として事前に送り届けました。それほどに、兄の許しが欲しかった。この問題が片付かなければ、先に進めない。そのような思いの中、いよいよこのヤボク川を渡るといういわば決戦の前夜になって、ヤコブは家族全員を先に渡らせて、ただ一人後に残りました。神の前に単独者として立ったのです。

私たちの人生においても、この時のヤコブと同じような経験をすることがあるのではないでしょうか。どれほどこの世的に成功し、人々の賞賛や誉を得ても、私たちの心の中にある重荷が全然解決してない。そのために深く祈らなくてはならない。そのようなとき、人は単独者となって神の前に立つということをせずにはおれません。森有正という哲学者、フランス文学者がおりました。祖父は森有礼（ありのり）という伊藤博文内閣での文部大臣をつとめた人ですが、この森有正さんは洗礼を受けたキリスト者であります。一高、東大で学び、のちに東大のフランス語の教授になりました。この人の言葉に「人は誰しも、決してほかの人に見せることのできない心の一隅を持っている」という言葉があります。ペルソナというラテン語があります。英語の person（人）の語源になっている言葉ですが、このペルソナはもともと「仮面」という意味をもつ言葉です。古代ギリシャやローマでは、演劇をする際に役者は仮面をかぶって劇を演じました。しかし、仮面をかぶるわけですから、素顔ではありません。悲しそうな場面を演じながら、仮面の下では笑っているかもしれない。そのように、人はほかの人の前で仮面をかぶって振舞っているとローマ人たちは考えた。ヤコブはこの時、仮面をはずさねばならなかつた。兄との対面を前にして自分の弱さやずるさを正直に認め、そのうえで自らの罪の赦しを祈ったのです。

このとき、ヤコブの前に何者かが現れ、夜明けまでヤコブと格闘したと聖書に書かれています。暗闇の中で登場したというのがポイントです。この人は顔を見せなかった。いや見せられなかった。間違いなくこの人は神の使いです。なぜなら、聖書では神を見たものは死ぬと言っていたからです。だから、夜が明ける前に姿をかくす必要があった。ヤコブは、この人と股関節を外されるほどの取組み合いをしながら、必死になって戦ったというのです。それはなぜか。この人からの祝福を求めたからです。

私自身のことを振り返って見てもそうですが、これまで自分が祈り願ったことに関して、神さまはしばしば自分の描くシナリオ通りに物事を進めて下さらないことがあります。信じて、自分を賭けて選び取ったことなのに「こんなはずじゃなかった…」と思うことがあります。牧師になったから、万事が思い通りになるわけではないのです。そのような時、どうするか。ヤコブのように神さまの前に食い下がって抵抗するのです。私が知っているある信徒の方は、若いころ仕事の傍らで通信教育を受けて、税理士の資格を取るための学びを重ねておられました。バプテスマを受けた常盤台教会の信徒の方です。ところが、税理士試験を何度も受けても不合格で、うまくいかなかった。その方は、ある日の夕礼拝で壇上に立て証しをしながら、「私の青年時代、私は神さまを恨み続ける年月を過ごしました」と言われました。それは、一つの例に過ぎません。「神さま、なぜなのですか。どうしてですか？」と呻きながら叫ぶような時が、私たちにはあるのです。

しかし、それは信仰生活をする中で当然のことだと思います。今日のヤコブの物語を読みながら思うこと、それは、人生におけるさまざまの困難、この世の矛盾や不条理について、その疑問を率直に神にぶつけて良いということです。しかし、私の経験で申し上げると、そのような疑問をぶつけても、神さまはすぐには答えをくださいません。神さまと取組み合いの格闘をしても、事態は相変わらずそのままで、すぐに問題が解決するわけではありません。しかし、今日の箇所において大切なことは、ヤコブがこの格闘をしながらも、神さまから離れなかつたということです。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」（27 節）と書かれる通りです。神に願い求め、祈り続けたがその願いはかなわなかった。神さまはも

ういい。わたしは、あなたには頼みません、と捨て台詞を吐いて、神の前を去ることをヤコブはしなかつた。創世記はヤコブ物語と言えるほどに、ヤコブの生涯を描きます。それは、彼が優れた人間性、優れた知性を持っていた人物だったからではありません。ヤコブは、むしろ弱さや破れをかかえた普通の人だった。だからこそ、自分が神の祝福なしには生きてゆけないことがわかっていた。このヤコブとは、実は私たち自身の姿であります。

さらに物語を読み進めます。28節を読むと神さまの方から人間に問われています。ヤコブに対して「お前の名は何というのか」と聞かれるのです。彼は「ヤコブです」と答えました。ここには、単に名前を聞くという事柄以上の意味が込められています。ヘブライ語の名前には、必ず意味があります。日本語の名前と同じです。ヤコブとは「足を引っ張る、欺く、だます」という意味があります。ヤコブがこの時、自分の名前を口にした瞬間、彼は自分がどういうものであるかを強く認識したと思われます。何しろ、相手は神さまですから。そして、その名の通り、自分がこれまでの人生を狡猾に生きてきたことも分かっていた。彼自身がそのことをよく知っていた。だからこそ、兄と会うのも怖かったのかもしれません。彼が、この時神さまに自分の名前を伝えたということは、神さまの前にありのままの自分をさらけ出したということです。

しかし、神さまはすべてお見通しだったのでしょう。この狡猾な男に向かって「あなたはヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる」と言われました。この言葉の意味が難解です。「神が支配する」「神と争う」「神が勝つ」などの意味を持つと言われます。しかし、29節で言われるよう、ヤコブがこの組打ちに勝利したとまでは言い切れないと私は思います。彼は、腿の関節を外されているのですから。

もしかしたら、ヤコブはこの時自分の人生は自分のものだ、自分の力で何とかなるものだという思いの下で、神さまをねじ伏せてやろうと思ったかもしれません。そんなことは到底できっこないのに、神を敗北させようとしていた。ところが、実際はそうはいかなかった。格闘の最中に股関節を外されてしまった。それによって、この戦いは「the end」（＝終了）です。ヤコブのほうが神に負かされてしまったのです。しかし、不思議なものでそれは心地よい敗北です。神さまとの戦いで、人は自分の弱さを思い知られ、神によって打ち負かされることによって、逆に神の祝福の中に入れられるのです。神に負けることで、逆にイスラエルは神に勝ったと聖書は書く。これは、あきらかに逆説です。神さまを相手にしたときは負けるが勝ちというのが、ここで語られている真理ではないでしょうか。

ここで、私は19世紀アメリカで無名の兵士の作品と言われる、つぎにような詩を思い起します。

大きなことを成し遂げるために力を与えてほしいと神に求めたのに、謙遜を学ぶように弱い者とされた。

より偉大なことができるよう健康を求めるのに、よりよいことができるようと病気を与えられた。  
幸せになろうとして富を求めるのに、賢明であるようと貧しさを授かった。

世の人々の賞賛を得ようとして成功を求めるのに、神を求め続けるようと弱さを授かった。

人生を享楽しようとあらゆるもの求めたのに、あらゆることを喜べるようにと命を授かった。

求めたものは一つとして与えられなかつたが、願いはすべて聞き届けられた。

神の意に添わぬ者であるにもかかわらず、心の中の言い表せない祈りはすべて叶えられた。

わたしは、あらゆる人生の中で最も豊かに祝福されたのだ。（渡辺和子訳）

この詩において、作者は願い求めたことがかなわず、むしろ真逆の現実が神さまによって与えられたことを見つめながら、それでもなお、今自分に与えられているものが神の御心であると受け止め、そこに神の祝福を見出そうとしています。いうならば、自分の願いが叶っても叶わなくても、それ以上に大きな事実、すなわち、自分が神のみ手の内にあることが、それ以上に大切だと詩人は述べています。だから、願ったものが何一つ与えられなくても、わたしは最も豊かに祝福されたものだと言い切っている。負けても勝っているのです。

こうして、夜が明ける前にこの人は自分の名を告げることなく、ヤコブのもとから去っていきました。しかし、その際にヤコブにとって決定的な救いの出来事を残してゆきます。それは、ヤコブが求めてやまなかつたあの祝福でした。神の使いはヤコブのもとから立ち去る前に彼を祝福したのです。この祝福は、20年前にヤコブが父から与えられた祝福とは比べ物になりません。ヤコブがそれを受けに値しない、弱くする賢く、罪深い人間であることをこの人は知っています。それが分かっていて、神さまはヤコブを赦し、受け入れ、新たな人生を歩むようにと、この罪人に祝福の手を差し伸べてくださつたのです。イスラエルとはヤコブの新しい名前です。私たちもイスラエルです。私たちは神と争いますが、神に勝つことはできません。逆に、神の前に全面降伏することで、新たな命と祝福を頂くのです。

お祈りいたします。